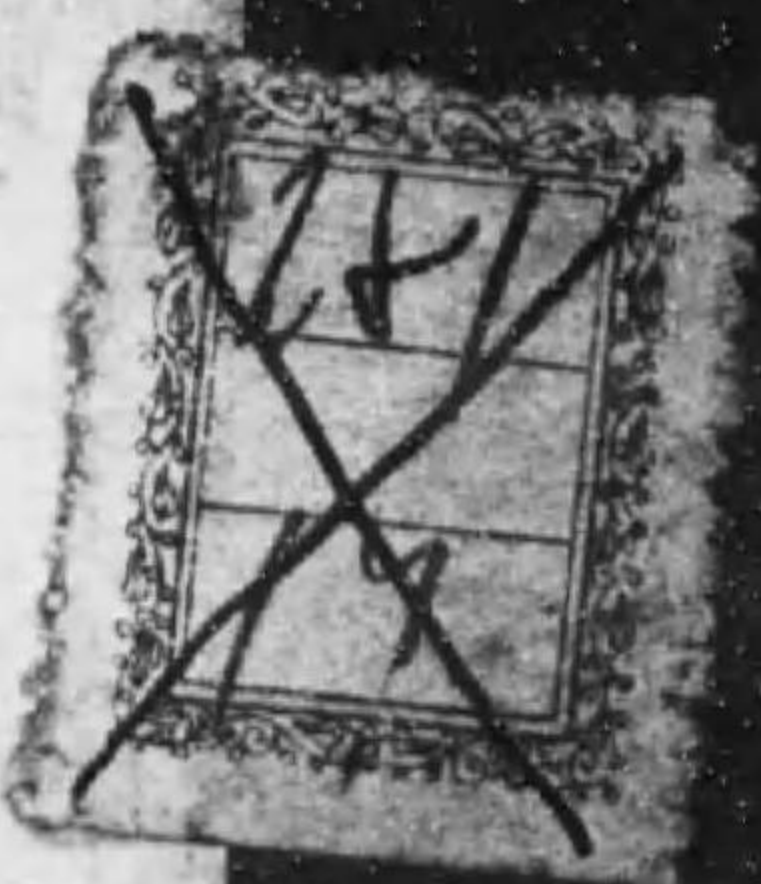


始



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9  $\frac{19}{70}$  1 2 3 4 5





持110  
181



Handwritten signature in cursive script (Sōsho), likely reading 'H. H. H.' or similar.





Handwritten text in Arabic script, consisting of several lines of cursive writing on the left page of an open book. The text is arranged in two main columns. The right column contains approximately four lines of text, starting with a prominent 'ب' (Ba) at the top. The left column contains approximately three lines of text, starting with a prominent 'ب' (Ba) at the top. The handwriting is fluid and characteristic of classical Arabic calligraphy.



紫にあくるあしたの河下る筏の上に  
山ざくら散る



花見れば命はかなし春毎に咲き散る。  
ことはさだめなれども

思ふどち董つみにと野邊にいでて今  
日もひねもす花をみしかな

たち渡る霞の上に花みえて春のあし  
たの野邊ぞあかるき

山かげはまだくらけれど咲く花の色  
ほのぼのと夜はあけにけり



おぼろよの花の木かげにおりたてば  
隣の宿の笛の音ぞする

山風になびく霞のたえまより雪かと  
ばかり散る櫻かな

青柳の絲もなびかぬ春の日にみだれ  
て花は散りそめにけり

谷かげの花のみ白く見えながら霞み  
て暮るゝ春の山かな



今朝みれば浮きたる雲のこゝちして  
風にみだるゝ山櫻花

色ふかく澄みたる春の大空も匂ふば  
かりにさける花かな

飛ぶとりの羽風をさへもいとふかな  
庭の櫻の花のさかりは

春雨の晴れて暮れ行く山かげにけぶ  
れる花の色のましろさ



青柳の絲にまじれる花を見てふと思  
ひ出でぬ千代紙の繪を

ひらひらと薄桃色の花散りぬみどり  
に匂ふ若草の上に

大寺の鐘のひときの聞えきてかなし  
く花の散る夕べかな

池水にうつらふ岸の花櫻ちれば重な  
るこゝちこそすれ



ことさらに憂をつゝむ笑のごと今日  
見る花の色のさびしさ

ひらひらと泡雪のごと散る花を惜し  
みもあへず手にうけてみつ

年ごとに八重も一重も咲きみちて櫻  
の國の春ぞたのしき

嵐山松の木の間  
の櫻花おろす筏のう  
へに散るかな



風ふけばちる花びらにうち乗りて今  
年の春の行くが悲しさ

梢ふく風のまにまに誘はるゝ花の行  
方やいづこなるらむ

有明の月の光は見えながら花より山  
の夜は明けにけり

ゆたかなる御濠の水にうつろひてみ  
どりにかすむ岸の青柳



大寺の鐘の音長し川ぞひの柳けぶり  
て夜の明けゆけば

軽らかに土ふみ出づる門のべの柳の  
絲を吹く朝の風

川下の橋紫に暮れゆけば岸の柳に月  
はのぼりぬ

山門の朱にうつろふ青柳を日傘に分  
けて入る少女かな



ふる雨に門邊の柳うちたれて賤が伏  
屋の晝しづかなり

朝がすみまだ晴れやらぬやちまたの  
柳のかげの静かなるかな

散りしける花のたえまにうつりけり  
縹色なる岸の小柳

しめやかに霞をわけてふる雨になび  
きしづまる青柳の絲



わが門の一本柳春たてば人まち顔に  
うちなびくかな

ふく風ものどかになりぬ水鳥の加茂  
川柳なびきそむれば

降る雨にけふる門邊の青柳におなじ  
色してうぐひすの啼く

花ゑまひ柳眉かく春の日にこの身ひ  
とりの何かうれへむ



音もなく柳にそゞぐ春雨を斜にうけ  
てとぶ燕かな

雨ちかき御空のもとにたよりなくゆ  
らぐ柳の姿わびしも

匂やかにもゆる柳のみどりより心明  
るくなりにはけるかな

姉君と門の柳のひまに見しかの夜の  
月のかげぞ戀しき



春雨の雲間はみえて露重き柳の絲に  
夕日てりそふ

蛇の目傘なゝめにさして雨細き柳の  
道を人の行きかふ

朝雲の紅にはふ水の面にうつろふ岸  
の青柳の絲

花やかにともる劇場しはかのともし火に御  
濠の柳うち煙りつゝ



旅館夏ときこゆる雨の音にめざめて  
ひとり母を想へる

窓近き桐のうら葉はかへれどももの  
静なり初夏の風

砂われて松露のみゆる松かげを雨に  
わが行く初夏のあさ



鐘の音間遠にひとく山里のつゝじ垣  
根にさす夕日かな

しげりあふ若葉の道を紅の日傘行き

かふ初夏の午後

夏くれば昨日の霞かげ消えて山明ら  
かに見えそめにけり

宵の雨に花はのこらず散りはてゝ夏  
の姿に山もなりにき



風ふけば藤の花ぶさ紫になびきた  
よひ夏は來にけり

人しれぬ憂を胸につゝみもて立てば  
若葉のかげも悲しや

海の色その青さにも似る空を若葉の  
ひまに見ゐるよろこび

書見つゝ一人ほゝるむ窓の中に若葉  
のほふ夏はきにけり



行く袖に楓の花のかつ散りて木かげ  
うれしき夏となりなき

重たくも若葉にほひて雨ながら暮る  
るさつきの庭のかなしさ

静かなる野寺の庭に藤散りて思出お  
ほき夏は來にけり

紫の露ふきちらす初夏の風にゆらめ  
く藤の花房



しらじらとうつき垣根のほの見えて  
月なき夏の宵のよろしさ

築山の緑を越えて吹く風にゆらぐ小  
窓のひなげしの花

花散りて若葉涼しき庭みれば目も新  
なる心地こそすれ

かざり井に影をうつしてわが庭は榿  
も楓も若葉しにけり



夕風の青葉を越えて吹きくれば蛙雨  
よぶ園の初夏

春がすみ晴れにし空の末に見ゆ緑こ  
まかき夏の遠山

にほやかに若葉ゆるがし吹く風に心  
うれしき初夏のあさ

ふる雨に緑にじめる初夏の山みてあ  
れば泪ぐましも



かなめ垣うすくれなるの葉のみえて  
初夏の日の強き色かな

若葉ふく風に流るゝ苗賣の聲すがす  
がし初夏のあさ

衣かろき夏はきぬれどわが兄の重る  
病を見るがわびしさ

紺青に空すみ渡る初夏のひるくれな  
ゐに燃ゆる花草



エメラルドその色よりも美しき若葉  
につゝむ初夏の山

夏立ちてさみどりかをる木の蔭に草  
はむ馬の静なるかな

紫の藤の花房うら葉ふく風にゆらげ  
ば涙ぐましも

去年の夏見しかたちして白き雲波の  
あなたに湧きいでにけり



重なれる青葉の影に風消えて暮るゝ  
さつきの森のしづけさ

こぼれさく躑躅のかげに鱗をふる池  
の金魚も夏めきにけり

夏の來ていと嬉しきはかるがろと袷  
の衣身にまとふこと

うるみたる腫にうつる初夏の夕べ青  
野の色のうれしさ



苗賣の聲もさやかに響き來て世は初  
夏となりにけるかな

けふるごと初夏の雨ふりそゝぐ森の  
若枝のみどり涼しも

ふく風に蒲公英の羽かろく舞ひみど  
りはてなき野を越えてゆく

トランプを切るにも似たる音たてゝ  
夏のはじめを散る古葉かな



桃いろの薔薇のつばみをふくらませ  
園ふきめぐる初夏の風

夕まぐれ若葉の雨を聞き居れば蛙な  
くなりふるえ聲して

いづこにか昨日の花はにほひにし青  
葉をぐらき初夏の森

夕されば若葉の上に雨ふりて夏のは  
じめぞものは悲しき



山もみな緑の衣にぬぎかへて夏の姿  
になりけるかな

露かわく若葉が上を照らす日の光も  
の憂き初夏の頃

國はみな新緑の香にみたされてよろ  
こび多き夏は來にけり

雨晴れし都大路を行く人のかざす日  
傘に清き風ふく



姉君のピアノの音のみさえ渡るさつ  
きの雨の宵の淋しさ

手にむすぶ泉の色のあさみどりあさ  
き夏こそ嬉しかりけれ

朝な朝な庭は緑の色そひぬ躑躅ばか  
りは紅にして

袖かろき衣にやかへむ竹の子も皮衣  
ぬぐ夏はきにけり



露重き若葉の杜をわが行けば夏なほ  
さむき朝風ぞ吹く

しげりあふ若葉が上に風ふけば名し  
らぬ小鳥さわやかになく

川添の柳のうへに山見えて清く晴れ  
たる初夏の雨

髪洗ふ盥の水にしらじらと行く雲う  
かぶ初夏のあさ



雨はれし木々の緑の露おちて袂涼し  
き夏衣かな

雨すぎし青葉の上に月みえて涼しく  
暮るゝ初夏の庭

いさゝかの病に苦き薬のむ藤の若蔓  
のびて行く日を

くもり日のみそらの下にたゝずめば  
物思はしう、にほひよる藤



錦繪の紫の上の顔のしみ見れば悲し  
もさみだれの窓

五月雨はまことに晴れてわが庭の若  
葉の上に夕日さすなり

五月雨の雲ふきすさぶ朝風に桐の花  
こそあまたこぼるれ



さらぬだにいぶせきものを旅やかた  
旅人多き五月雨のころ

行末の身を思ふ夜となりにけり五月  
雨細き窓にもたれて

五月雨はことにももの憂し旅にして病  
み居る叔母の面影にみえ

夏草のしげれる庭に緑なる波たてゝ  
降る五月雨のあめ



泣きしあとの目の赤さなり五月雨に  
ぬれてにはへる垣のかなめは

五月雨の晴間うれしと思ふまに又も

きこゆる玉水の音

あやめさく池の面にあや織りて今日  
もひねもす五月雨のふる

五月雨のそゝぐ夕べの小山田に聲を  
限りになく蛙かな



五月雨にうみし梅の實窓近き土うつ  
よはの音のさびしさ

今朝もまた光をかくす五月雨の雲ふ  
き掃へ大空の風

をやみなく降る五月雨にはたづみ  
池と一つになりにけるかな

夢に見しかの緑よりなほ暗し五月雨  
の日の木々の葉の色



五月雨はけさ晴れたれど雨よそひし  
てなほ人の行く大路かな

大川の蘆間の灯ほの見えて夕暮どき  
を五月雨のふる

降りやまぬさつきの雨のつれづれに  
ひけば小琴の音さへ悲しき

窓の木に人形つりて五月雨の晴れむ  
日をおみ待つ少女かな



裏山の鼻の聲もうちしめり一人居淋  
し五月雨の宵

五月雨の雲うすれ行く山の端に笠著  
て月の出でにけるかな

たゞ一人ほゞづゑつきて聞き入れば  
淋しくもあるか五月雨の音

雨暗きさつきの窓のつれづれを慰め  
かねてとる書筆かな



心地よく五月雨はれし夕暮をなつか  
しみ見る垣の白薔薇

雨をよぶ蛙の聲もうちまじり水音高  
し五月雨のころ

濡れて行く子持鳥の聲はして五月雨  
そゝぐ夕暮の森

菖蒲さく池のみぎはに立つ鶯の簑毛  
しととに五月雨のふる



灰色の雲ほのぐらき空の下に貧しく  
生くる五月雨の頃

ほの赤う濡れてにじめる町の灯に泪  
ぐましき五月雨の宵

朝夕に折りたく柴もしめるらむ五月  
雨そゝぐ山かげの庵

落ちまさる軒のしづくの音きけばわ  
びしや今日も五月雨のふる



新なるおもひ湧けよと降りそゞぐさ  
つきの朝の雨は嬉しも

雨ふればかなしみやすきわが胸に重  
たく匂ふ紫陽花のはな

何となく心のうちの安からぬ五月雨  
の夜を風ふき出でぬ

君なくてながむる庭の石菖に音なく  
そゞぐ五月雨のあめ



ほのぐらき五月の雨にわが泪をへて  
も散るか山桐の花

思はずもうたゝねしけり五月雨の窓  
に涼しきたちばなの香に

五月雨の雲間の月に若竹の葉末の露  
のかとやけるかな

青葉ふくあしたの風に五月雨の晴間  
を落つる露のさやけさ



五月雨のふりて静かに更くる夜にを  
さながたりをし出でます母

蛙さへ泪さそひて五月雨のふる夕暮  
ぞものは悲しき

五月雨は夜の間には晴れて朝日さす岬  
の上に富士の山みゆ

しめやかに池の蛙のなき出でてさみ  
だれさむし夕暮の宿



梅雨晴の日ざしあかるき青葉かげ啼  
くや雀の雛のいとしさ

いさゝかの胸さす思五月雨に今日も  
泪となるがわびしき

繁りあふ藤の若葉のひま漏りて青き  
雨ふる阜月ついたち

今日もまた憂の雲のひろごりて心を  
ぐらし五月雨の窓



五月雨の露を散らして風渡る背戸の  
桑畑夕日さすなり

五月雨に小さき傘をならべつゝ學の  
庭に行くうなるかな

うかれ出でむ心の駒をたちばなの花  
につなぎて五月雨の降る

日を経つゝふる五月雨に夜は更けて  
泪催す鐘の音かな



めづらしき雲の絶間に月させば青葉  
に光る五月雨の露

降りそめて雲間も見えぬ五月雨に梅  
の實さへもうみはてにけり

愛でてかふ籠のうさぎの目に似たる  
赤きいちごに銀の雨ふる

たえまなくふる五月雨にうみはてし  
この身一人も淋しかりけり



泣くがごとふる五月雨になき友を思  
へば泪はてなかりけり

雨ふりては  
五月雨になき友を思  
へば泪はてなかりけり

ほの青く流るゝ川の水の上に螢とび  
かひ夕べとなりぬ

端居して一人淋しくながめけり池の  
浮藻にすがる螢を



夏草の青きが中に咲きまじる百合の  
にはひの清き山かな

籠を漏りし螢の影の闇の中に見えず  
なりたる後のさびしさの土のまじり

山百合の花の白くもにはふかな晝も  
をぐらき夏の谷間に

少女子のとりあふ聲の高きかな螢の  
数は少なけれども



たちこむる靄の中より百合の花しら  
じらと浮く朝の夏山

放ちたる螢のかげに見ゆるかな淺茅  
が中のなでしこの花

底青き光をはなち露重き草の葉かげ  
にゐる螢かな

露多きあしたの庭に青きまで白き顔  
してさける百合かな



吹く風に澤邊の螢むれ立ちて夏のは  
じめの闇ぞすゞしき

川風に袂ふかせて妹等の螢とる夜は  
更けずもあらなむ

菖蒲太刀さして騒げるいとし子を細  
き目をして見入る母かな

亡き叔母の愛でし花とて美しく咲く  
百合見れば泪ぐまるゝ



雨すぎし澤邊のあしの葉かげより螢  
むれとび夜は更けにけり

螢火にわが足もとを照らさせて一人  
わけ行く宵の草むら

川岸の柳一しほしだれきて螢火よわ  
き夏の宵かな

夕月は空にかゝりてあしの葉をふく  
川風に螢みだるゝ



高萱のみどりを分けて吹く風に白百合にほふ夏の山かな

夕暗にあやめかをりて緑なる星の如くに螢とぶころ

螢火の光も眠るあかつきの窓に涼しくにほふ百合かな

たどり行く野末の里の火は消えて螢ばかりぞ道てらしける



むれて飛ぶ螢の影をしるべにて暗夜  
わが行く川添の道

夕暮の雨の晴間を時ぞとて草葉はな  
れてとぶ螢かな

浴衣吹く風を涼しみわが凭れるおば  
しま近くとぶ螢かな

夕暮の里の川邊にたゝすみて螢の行  
方見送りしかな



青白き光すゞしく蚊帳の中を甥の放  
ちし螢とびかふ

青き火を柳のかげにほのめかし螢過  
ぎたる後の悲しさ

わが瞳うるほひおぼゆ白百合の清き  
姿をあした見つれば

あけ近み力もなげにとびかへる螢の  
影をみれば悲しも



夕月の光も疎き木がくれの水をてら  
してとぶ螢かな

家土産の螢の籠のさみどりの色すが  
すがし夕暮の道

背きたる人の様していと淋し夕べの  
百合の青白き花

音もなく夜風ふくらし川添の柳はな  
れて螢とぶみゆ



戸をくれば胸にしみ入る曉の霧にま  
じりて百合の香ぞする

妹が池の汀にあやめきる鉄刀の音も  
こゝちよき朝

水の音さびしくひゞく谷かげに白き  
顔してほゝるめる百合

大空の星の流ると思ふまで川面ひく  
くとぶ螢かな



いと深き憂をひむる笑のごと山百合  
咲けり青草の中に

川風に吹きたてられて青黒き夜空高  
くもゆく螢かな

五月雨の雲間の夕日てりそへば池の  
あやめの花にほふなり

露しげき川邊の小草ふみわけてとる  
や螢に夜の更けにけり



雨晴れし澤邊の螢あしの葉の露に濡  
れつゝとぶが涼しさ

さやかなるおのが光をほこりに見  
せても闇を縫ふ螢かな

もの闇き今日の心にいとせめて螢が  
ほどの光さし來よ

たゞ一人夕べを來ればほの白う百合  
のゆらげる初夏の山



うれへつゝ見やればさびし初夏の小  
百合の花も森の若葉も

夕立のなごりの庭のたまり水夜を待  
つ星のかげをうつせる

門に出でゝまたゝく星をながめつゝ  
兄のかへりを待つ夕べかな



山の端にかゝりやきそめて大空のあは  
れを見する夕づゝの影

雨晴れし木立のひまに明るくもわれ  
みて照れる夕暮の星

朝の日をなゝめにうけて夏青き山に  
さゆらぐ白百合の花

なごりなく夕立晴れし大空にまたゝ  
く星の多き涼しさ



空に満つ星の光を眺めつゝものをも  
いはである夜さびしも

夏の夜の濱風渡る砂山に夢みる如く  
さける花草

夏草のしげみの中に思ひわびうなだ  
れて咲く姫百合の花

見るからにあはれとぞ思ふ朝露に濡  
れてほゝるむ撫子の花



夏襟の金のちらしを見る如し葉月の  
空にかとやける星

風わたる草のしげみに見出でけり折  
り残されし白百合の花

清らけき瞳の如き星の下に兄ありし  
目を思ひては泣く

雨はれて青く澄みたる夜の空にした  
たる如く光る星かな



うす紅の色さめぬほど一しきり晝顔  
ぬらす夏の雨かな

月もなき宵を淋しとうち嘆き見あぐ  
る空にてりそむる星

運きると小舟をやれば夏の星淋しく  
水に影おとしけり

照り渡る日かげに堪へで撫子の土に  
ふしたるしほらしさかな



夜のいのり神にさゝぐと桃色のカー  
テンひけば星の流るゝ

蛸の啼きて暮れ行く山かげに白うの  
これる一もとの百合

あけぼのゝ露置く庭に一本の撫子の  
花の咲ける淋しさ

夜は更けぬ何處に君はおはすらむ見  
上ぐる空に星のまたゝく



たけのびて風も通はぬ草かげに涼し  
く咲ける撫子の花

はてもなき荒野の原に行き暮れてた  
たずむ上に照りし星かな

更け行けば花火の音も絶えはてゝ見  
上ぐる空に星ぞきらめく

夕闇の底にはのめく星のごと繁みの  
中に咲ける白百合



日盛を魚釣り歸る田舎道晝顔咲けり  
時を得顔に

風吹けば池の蓮葉うらがへり葉がく  
れに咲く花も見えけり

夕立の雨にうたれてひた土に濡れて  
伏したる撫子あはれ

泪してあふぐ瞳にほの赤うにじむ光  
もあはれなる星



照る月も去年の今宵に似たりけり思  
出多き夏にもあるかな

紅の泪宿して夕暮の庭にほへるな  
でしこの花

若薄青きが下に撫子は淡桃色に咲き  
出でしかな

舟にして下ればをかし里河の堤つと  
きの撫子の花



朝戸出の庭に微笑む撫子の花見る心  
うれしくもあるか

砂山に折残したる白百合を思ひ寢覺  
めて小夜嵐聞く

故もなく母に背きて出で來れば悲し  
く青き星の色かな

白み行くみ空の中に一つづつ吸はれ  
て消ゆる明方の星



うるみなきみ空の星の瞳より得たる  
今宵の軽き悲しみ

蝸の聲なほ杜に響けども梢は月にな  
りにけるかな

海の風音して渡る濱松の木かげに揺  
らぐなでしこの花

打水の涼しき庭に下り立てば木の間  
よりさす夕月のかげ



美しき夕べの露にはの赤うにじみ出  
でたる撫子の花

夕暮を泪しをれば撫子の花にも葉に  
も露を置きける

よく笑ふ目の風情して二日月若葉の  
上に薄くにはへる

撫子の花を折らむと日傘して渡る小  
川の水の冷たさ



夏草の強き緑に倦みはてし腫休むる  
なでしこの花

藍靨の杜の流の色愛でてむすべば袖  
に月の涼しき

さめやらぬ夢の名残かほのぼのと朝  
のさ霧に浮ぶ撫子

露白き朝の川岸なでしこの我待顔に  
咲けるうれしさ



夏の夜の更け行くまゝに青桐の葉が  
くれがちになれる月かな

縁側の板ほの青う光るかな月出でぬ  
らし水無月の空

故郷のしげき夜露にそぼつらむ昔わ  
が見し撫子の花

白き雲波の如くにひろごりてをりを  
り月をかくす涼しさ



夏木立暗きが中をしろがねに月の光  
の流れ行くかな

おほらかに夜風渡れば若薄しらじら  
として月に光れる

夏草のしげき野中にたゞ一つ紅撫子  
を見たる喜び

愛らしきわすれなぐさの花に似る星  
も涼しき夏の夜の空



静なる朝の光にうち濡れて紅にほふ  
なでしこの花

月見草咲く夕暮を砂山にのぼれば月  
は波を離れぬ

夏草のそよげる中に撫子の色つめた  
くも暮れて行くかな

白玉の露にしととに濡れて居ぬ淡桃  
色の撫子の花



靄深き河原の道を朝行けばなでしこ  
の花のほのかなるかな

紫陽花も山撫子も露草もみなうつむ  
けり月に向へば

紅ふくむ筆の穂に似る撫子のつばみ  
を取りぬ淋しきまゝに

眞蒼なる蚊帳にさし入る月影に安き  
寝顔の子の麗しさ



草雲雀なく草むらに露見えて薄く匂  
へる宵の撫子

夏川の蘆の葉白くそよぐかな銀の色  
せる月の光に

降る雨にかたくづれせる谷かげに残  
りてにほふ撫子の花

夕立のしづくまだ散る山かげの竹む  
ら通しさせる月かな



釣籠の魚銀色にか  
イヤキぬ川瀬あか  
るき月の光に

波の音しづけき磯の岩の上に月待ち  
ながら夕涼みする

夕立の過ぎし青野を吹く風に靡き伏  
したる撫子の花

露じめる野邊の空氣に息づきてこの  
曉を咲ける撫子



夕ぐれの茅原萩原わけ來れば蟲の聲  
ふむこゝちこそすれ

草かげの野菊の花に露見えて山の松  
が枝雨晴れにけり

吹く風もいつしか秋をにははせて野  
は八千くさの盛となりぬ



くづれたる赤土山の麓にて裸なる子  
が相撲とる秋

夕月の光も青き川岸のすゝきを渡る  
初秋の風

蒔けるごと眞萩が花ぞみだれたる雨  
よりしげき露の細道

被衣着ておはする姫と朝霧の中に伏  
したる秋萩の花



肌寒き風に流るゝ木犀の甘き香うれ  
し初秋の朝

おくつぎに萩の初花手向けつゝしみ  
じみと聞く虫の聲かな

立籠むる霧のもなかに群れて鳴く小  
鳥の聲も秋めきにけり

見し夢の覺めて淋しき曉の庭の落葉  
に雨そゝぐなり



木犀の甘きかをりを乗せて来て袖に  
うれしき初秋の風

桐の葉をしたゝる雨の音聞けば書讀  
む心静けかりけり

降りすぎし初秋の野のむらさめに濡  
れてうつむく八千くさの花

たよりなく落ち行く葉をば見つめつ  
つ用なきことを思ふ初秋



初秋の草にも木にも風絶えてをかし  
きまでにしづまれる午後

水晶のつめたさに似てさ霧立つ杜よ  
り来る初秋の風

初秋の泪催す風の聲憂ある身にせま  
り來にけり

夕まぐれ露置く庭におり立てば萩の  
うねりに秋風ぞ吹く



ぬばたまの闇の夜露や下りつらむ濕  
りて響く蟲の聲かな

秋風の聲をたつれば天地はもの淋し  
さのかげにかくれぬ

朝霧はいつしか晴れて窓近き萩の上  
葉に秋風ぞ吹く

初秋は慰むるものなきまゝにわれと  
わが身のいとほしまるゝ



小夜更けて月に打つらむ賤の女の砧  
の音のほのかなるかな

初秋の梢黒みて日の入れば今日もい  
さゝか物のわびしき

夕月の青くさしたる庭の面に黒く舞  
ひつゝ散る木葉かな

二つ三ついちけしさまの秋茄子に夕  
日のこれり春戸の山畑



一枝を折りてぞかざす甘き香をさ霧  
に流す木犀の花

白緑の薄を濡らし薄色の紫苑にそゝ

ぐ初秋の雨

初秋の野末の花にあかあかと夕日の  
照るを見つゝ歸りぬ

軒に張る蜘蛛の糸よりなほ細く眞萩  
にそゝぐ初秋の雨



暗き夜を初秋風の吹き渡る大木の下  
に鈴虫の鳴く

村雨はいつしか晴れて白萩の散りこ  
ぼれたる初秋の庭

薄き羽に夕日をうけて紅のかげろふ  
を飛ぶ川沿の道

たえだえに蟬鳴く木々にさせる日の  
赤きを見れば秋にしあるらし



百舌鳥の聲聞えし後は聲もなくげに  
静かなる初秋の晝

秋の立つ畑見にすれば紫の茄子をゆ  
すりて朝の風吹く

露繁き草むら分けて鈴虫をとるらむ  
人の灯のかけ

昨日かも涼みの人に賑ひし川の岸邊  
もたゞ秋の風



眺め入る目にしみじみと初秋の星の  
光のあはれなるかな

小萩咲く園の蟲の音聞きながら書讀  
む秋の宵のたのしさ

松風も秋と響きて鳴く蟬の聲弱り行  
く夕べ悲しも

夕暮のうすき日ざしにかげろひて蜻  
蛉飛びかふ秋の川岸



淋しさを我と慰むこゝちして蟋蟀鳴  
けり初秋の庭

抱きしむる人形の玻璃の瞳にも秋通  
ふらしものゝ淋しき

一人立つ川邊の蘆を揺がして肌快し  
初秋の風

一群の旅の小鳥のおとづれに秋めき  
渡る山の木々かな



ゆくりなく見つる桔梗の紫に秋の心  
の目覺めたる朝

おほらかに晴れたる空を群れわたる  
鳥の羽音も秋は悲しや

初秋の風に揺らぎて新塚のしめれる  
土に萩が花散る

青桐の落葉を窓に吹きあてゝ耳おど  
ろかす初秋の風



街燈のほかげ匂はし薄霧の流るゝ町  
に秋は來にけり

乾きたる土に打ちたるうち水のにじ  
みもにぶくなりぬあゝ秋

松風にたぐひて響く蟬の音も秋と聞  
ゆる山のかげかな

寢室の窓掛漏りて初秋の日は病む叔  
母の横顔にさす



やうやうにうち忘れにし一事を思ひ  
出でよと秋の風ふく

桃色の芙蓉の花の露じめりいと快き

初秋の朝

かすかにも頭ぞ痛む木犀の花散る下  
に物を思へば

水引の濃き紅の花濡らす雨もつめた  
き初秋の庭



池の面に白萩の花散り浮きて漂ふ見  
れば秋は淋しき

讀みさしの本の表紙の水色も淋しか  
りけり初秋にして

朝顔もちさくなくなり行く初秋の庭にみ  
ちたる虫の聲かな

初秋の岡に上ればしらじらと雨のを  
やみに屋並光れり



秋くれば野にも山にも露置きて月の  
宿らぬ草の葉もなし

夕風に薄の露の亂るれば心ひそかに  
神を思ひぬ

流れ来る雲をうらやむ子となりて秋  
のはじめを物思する



雁鳴くと背戸に出づれば秋の夜の空  
ひろびろと月のちひさき

ほの黒き杜より月の出で来ればわが  
うれしさの湧く心地する

やるせなき物淋しさの姿して月に浮  
べり森の梢は

あかあかと實れる庭の南天を嘴せは  
しくもついはめる鶺鴒



雁の來る山田のおしね露見えて有明  
の月のかげ静かなり

吹き荒れし野分の風の音たえて夜中  
淋しき月のかげかな

青白き月の光にちさき影つくりて公  
孫樹ほろほろと散る

うち向ふ心苦しくなり  
にけり月の鏡  
のあまり澄めれば



染めあへぬ柞の上に鳴く百舌鳥の聲  
の鋭き秋の淋しさ

夕べ夕べ澄みたる空を行き廻り心静  
けき秋の月かな

二つ三つ木の葉落してちゝと鳴く小  
鳥の影も秋は悲しや

泣きも得ず笑みも得ずして額たれて  
月にそむけるわが弱さかな



いねかねて窓の戸押せば庭松の梢静  
かに月ぞ傾く

はかなくも打ちすてかねし思故もの  
なげかしき秋の夜の月

玻璃の戸を開きて立てば湯上りの肌  
にひやびや月させりけり

隈もなき今宵の月のかげ見れば愚な  
る身の恥しきかな



夜嵐の音は野末に響きつゝ有明の月  
の澄みまさり行く

小春日の青きみ空に見入る目をふと  
掠め行くちさき鳥かげ

古寺の朱の柱に身をよせて落葉を照  
らす月を見しかな

雲一つ浮ばぬ空に照りながら静かに  
月の西へ行くかな



置く露にコスモスの花傾きて夢見る  
如き庭に月照る

小夜更けてさし入る月ぞあはれなる  
野分に荒れし軒の板間に

照る月の光のあまりあかければ面ふ  
せざる夜はなかりけり

秋深み柳の枯葉落ちそひておぼしま  
寒き月の色かな



ほのかにもさ霧流るゝ水の面に白け  
てうつる有明の月

曇りたる己が心を知らぬごとみ空高  
くも澄める月かな

秋更けてやゝ色づける柚の實に月あ  
かく照る山里の庭

戸もさゝぬ野邊の伏庵青白く月のか  
げさし夜はふけにけり



窓にうつる芭蕉の影も傾きて蟋蟀の  
鳴く薄月夜かな

夕月の光の中にコスモスの悲しく揺  
らぐ秋の停車場

鶉鳴く秋の枯野の夕月に置く露白き  
花すゝきかな

たゞ一人隈なき月を眺むれば身のは  
かなさに泪ぐまるゝ